

「神様の御手に」

ルカによる福音書 23:44~56

サムエル記下 22:17~20

2023年4月2日
野村 友美 師

<棕櫚(しゅろ)の主日>

皆さん、おはようございます。改めましてよろしくお願ひいたします。

今日は呉教会に遣わされて初めての礼拝で、とても緊張しています。

ここから皆さんと一歩ずつ、ぼちぼちと一緒に歩いていきたいと思っています。

さて今日はいよいよ受難週の初めの日、

棕櫚の主日と呼ばれる日曜日でもあります。

今日からの一週間は、イエス様がエルサレムで十字架にかかって死なれて 復活されるまでの出来事を思い起こして過ごす一週間です。

棕櫚というのは、ナツメヤシのことなんだそうです。イエス様が子ロバの背中に乗ってエルサレムの町にお入りになったとき、人々は手にナツメヤシの枝を持って、それを振ってイエス様を歓迎したとヨハネの福音書が描いています。このことを記念して、教会は受難週が始まる日曜日を「棕櫚の主日」としています。

教会によっては、礼拝の初めにナツメヤシの枝を持って会堂に入ったりもします。

そして明日の月曜日はいわゆる「宮潔め」、イエス様がエルサレム神殿の境内で商売をしていた人たちを追い出して、「ここは祈りの家でなければならない」とお教えになったことを記念する日です。

火曜日は神殿でイエス様が人々に話をしたり、祭司長や律法学者たちと議論なされたこ

とを思い起こして、水曜日はエルサレムに近いベタニヤという村で1人の女性がイエス様の頭に香油を注いだことを記念します。

木曜日は最後の晩餐の日、イエス様が弟子たちの足を洗って「お互いに仕え合いなさい」と教えた出来事を記念して、洗足の木曜日とも呼ばれています。

そして金曜日が受難日、十字架でイエス様が死なれた日です。イエス様が私たちすべての人の身代わりに背負ってくださった痛みと苦しみを思い、自分の罪に向き合って、悔い改めと感謝の祈りを捧げながら、復活を祝う朝を待ち望む。それが、この受難週という一週間です。

罪に向き合って悔い改めて、って辛いし重苦しいし大変な感じですが、受難週は神様からの愛に向き合って圧倒される一週間でもあると思います。こんなどうしようもない私を、あんなあの人を、それでも神様は愛しておられて「あなたを失くしたくない、一緒に生きよう」と手を伸ばして救おうとしてくださっている。「これはわたしの愛する子」と宣言なさった大切なひとり子のイエス様を犠牲にしても、こんな私たちを、神様は助け出して抱きよせようと決めてくださった。それが、イエス様の十字架での死の理由です。

私もあの人もみんなどうしようもなく弱い罪人で、それでも神様から愛されていて大事に思われているという事実を、イエス様の十字架の出来事が証明しているんです。

だから今日から始まる受難週、改めて神様からの愛に圧倒されながら1日1日を過ごしていきたいと願ひます。

<変えられた人たち>

父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。

そう言って、イエス様は十字架の上で息を引き取られました。このイエス様の死が、それを目撃した人たちの思いと行動を変えたことをルカの福音書は今日の場面で伝えています。

まず、ローマの兵士たちを束ねる百人隊長。彼はつい先まで、イエス様を冷ややかな目で見つめていたはずの人でした。イスラエルとは宗教も価値観も違うローマの軍人ですから、この百人隊長にしてみたらイエス様が神様から選ばれた救い主だろうがそうじゃなかろうが、どうでもいい話です。お前がユダヤ人の王なんだったら、イスラエルよりも先にまず自分を救ってみろ！ローマの兵士たちがそう言って、十字架の上のイエス様を罵っていた時も、この百人隊長は止めるでもなく黙って、彼らの好きなようにさせていました。もしかしたら、彼も一緒になってイエス様を侮辱していたのかもしれませんが。でもイエス様が息を引き取られた時、この百人隊長は畏れを込めて「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神様をほめたたえたというんです。

そして、十字架刑を見物に来ていた群衆。無関係の野次馬としてイエス様を見ていた彼らは、胸を打ちながら帰って行きました。当時のイスラエルの人たちにとって、胸を打つという動作は深い悲しみと罪の悔い改めを表すものです。イエス様の苦しみも死も他人事だったはずの人たちが、自分の罪を悲しんで、悔い改める気持ちになったというんです。いったい、どういうことなんでしょうか？

イエス様が十字架にかかれて息を引き取

る直前、まさに天変地異としか言いようのない不思議な現象が起こった、と福音書は描いています。昼の12時ごろから3時間もの間、太陽が光を失って、辺りは真っ暗になりました。エルサレム神殿のいちばん奥、神様の場所である至聖所にかかる垂れ幕が真ん中からまっぴたつに裂けました。どちらも自然に起きるような出来事じゃありません。イスラエルの人たちもローマの兵士たちも、誰もが「これはただ事じゃない」と不安に思わずにはいられなかったでしょう。これは神様の力で起きていることだ、神様の怒りだ、という恐さを感じたかもしれません。でも、それだけじゃなかったんです。光が消えた暗闇の中で、耐え難い痛みと苦しみを味わいながら、死を目の前にしたイエス様は「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます！」と大声で叫ばれました。

他の福音書は、イエス様が十字架の上で叫ばれたもう一つの言葉、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という訴えを伝えています。なぜ？と訴えずにはいられないほどの苦痛と孤独と悲しみを、この時のイエス様は味わっておられました。なぜ？と叫ばずにはいられない状況の中で、それでもイエス様は最後のときまで父なる神様に信頼しておられたんです。神様が関わっておられるとしか思えない、理解を超えた現象の真ただ中で。苦しんで悲しんで「なぜ？」と叫びながら、それでもイエス様は息を引き取る瞬間まで、神様がなさることにご自分をまかせ抜かれました。その姿が、見ていた人たちの心を揺り動かしたんです。

イエス様の死には、神様が関わっておられる。神様は私たちの真ただ中で、今まさに生きて働いておられる。

私たちは今この時も、神様の御手の中にいる。そう思われたからこそ、外国人の百人隊長はイエス様の正しさを認めて、野次馬だった人々は自分たちの罪に目を向けて、それぞれが神様の御手を感じて、それぞれの心を変えられたんです。

イスラエルの最高法院、サンヘドリンのメンバーだったアリマタヤ出身のヨセフも、やっぱりイエス様の死によって変えられた人でした。彼はもともと善良な正しい人で、イエス様を殺そうという仲間たちには同意していなかった、神の国を待ち望んでいた、とルカの福音書は紹介しています。確かにヨセフは他の議員たちと違って、イエス様に悪意を持ってはいなかったんでしょう。ただ、彼がイエス様の裁判で「このやり方はおかしい、私たちはまちがっている」と声を上げたという記録はありません。イエス様が捕まる前も捕まった後も、特にイエス様を助けようとしたわけでもなさそうです。心の中では「まちがっている」と思いながら、でも1人じゃどうしようもないと諦めたのか。それとも、自分の立場が危なくなるのが不安だったのか。とにかくそれまでのヨセフは、イエス様のために何かしたくてもできなかったんでしょう。でもイエス様が死なれた後、彼はローマ総督ピラトのところまで行ってイエス様の遺体を引き渡してくれるように頼んでいます。これは大変なことでした。ただでさえ、ローマに逆らう政治犯として死刑になった人の関係者

だと名乗り出るのはかなり勇気がいることだったはずですよ。しかも彼が所属しているサンヘドリンは、イエス様を憎んで殺した張本人たちでした。だからわざわざイエス様の遺体を引き取って埋葬したなんて知られたら、仲間たちから責め立てられて、議員の資格を失ってしまうかもしれなかったんです。それでもヨセフはもう、動かすにはられませんでした。

イエス様の死には、神様が関わっておられる。神様は私たちの真ただ中で、生きて働いておられる。十字架で死なれたイエス様の姿に、ヨセフもそう思われたんじゃないでしょうか。

私は今この時も、神様の御手の中にいる。その確信はヨセフにとって何よりも心強くて、勇気が湧いてくることだったんだと思います。イエス様が死なれたのは金曜日の午後で、当時の暦では日が沈んだら土曜日、ユダヤ教の安息日が始まってしまいます。安息日にはどんな仕事もしてはいけない、と律法で決められていましたから、イエス様の埋葬もとにかく日が沈むまでに済ませる必要がありました。不安でドキドキするし、時間がなくて慌ただしい、そんな中でもヨセフは精いっぱい丁寧に、イエス様を埋葬しています。上等な亜麻布で遺体を包んで、まだ誰も葬られたことがない新しくてしっかりした造りのお墓を手配して、ヨセフはイエス様をお墓の中に納めました。

<神様の御手に>

百人隊長と、十字架刑を見物していた人たちと、アリマタヤのヨセフ。神様の御手を感じて変えられた人たちの姿と一緒に、変わることなく神様の御手にすがり続けた人たちの姿も、この場面には描かれています。イエス様の出身地、ガリラヤ地方からずっとイエス様に従ってきた女性たちです。彼女たちは、イエス様が十字架の上で死なれる様子をじっと見つめていました。そして、ヨセフがイエス様の遺体を引き取ってお墓に納めたのも、お墓の場所もしっかり見届けてから、家に戻って埋葬用の香料と香油を準備しました。それからこの女性たちは、安息日の掟に従って休んだ、とルカの福音書は伝えています。

さらっと流してしまいそうですが、これはよく考えたらすごいことだと思います。だって、救い主だと信じてずっとついて来たイエス様が、よりによって神様に仕える祭司長とか律法学者たちから犯罪者扱いされて、十字架刑で殺されてしまったんです。神様どうして？と、絶望せずにはいられなかったでしょう。それでもこの女性たちは、イエス様の死を最後まで見届けて、遺体の行き先も確かめて、埋葬の仕上げに必要なものも準備して、イエス様に従い通そうとしています。ガリラヤからここまで、彼女たちはずっとイエス様に信頼し続けているんです。イエス様だけじゃなくて、イエス様を救い主としてお選びになった神様にも。だから、イエス様が死んでしまったという絶望的な状況の中でも、この女性たちはいつも通りに、神様の掟を守って安息日を過ごしています。

悲しくて不安で希望が見えない今この時も、私たちは神様の御手の中にいる。この確信にすがりついて、彼女たちは神様に信頼して従っているんです。希望が見えない暗闇の中で、それでも今この時、私は神様の御手の中にいる。こんな私を、それでも神様は愛しててください。この事実を、十字架の上のイエス様が私たち一人一人に差し出しておられます。

旧約聖書のサムエル記は、イスラエルのダビデ王が受け取った同じ確信をこんな言葉で伝えています。

「主は高い天から御手を伸ばして
わたしをとらえ、
大水の中から引き上げてくださる。
敵は力があり、わたしを憎む者は
勝ち誇っているが、なお、主はわたしを
救い出される。
彼らが攻め寄せる災いの日、
主はわたしの支えとなり、
わたしを広い所に導き出し、
助けとなり、喜び迎えてくださる。」

(サムエル記下 22:17~20)

今この時も、私たちは神様の御手の中にいます。悲しむ時も悩む時も、苦しみと絶望に覆われている時も、神様の愛が私たちを捕まえて支えて、導いて、助けて、溺れかけの私たちを必ず引っ張り上げてくださいます。だから安心して、勇気を出して、それぞれの場所へ送り出されていきましょう。神様の愛の御手にすべてをゆだねて。お祈りいたします。